



# クィア学会 第4回大会

Japan Association for Queer Studies <http://queerjp.org/>



開催地：中央大学多摩キャンパス 3号館2階

開催日時：2011年11月12日(土) - 13日(日)

- |           |                                 |
|-----------|---------------------------------|
| 11月12日(土) | 10時開場 映画上映会(主催:関西クィア映画祭実行委員会)   |
|           | 12:00 受付開始                      |
|           | 13:00 - 16:00 シンポジウム            |
|           | 16:15 - 17:45 総会                |
|           | 18:00 - 20:30 懇親会(学内・1号館1406号室) |
| 11月13日(日) | 10:00 - 12:20 分科会(個人報告・パネル)     |
|           | 13:20 - 16:15 分科会(個人報告・パネル)     |

大会参加費 会員1,000円、非会員(一般)2,000円、(大学生)1,000円

## 目次

シンポジウム詳細 .....	2
同時開催プログラム .....	3
報告者索引(50音順)、個人/パネル報告インデックス .....	4
個人報告/パネル .....	5
大会会場案内 .....	11
トイレについて .....	11
お弁当について .....	11
懇親会について .....	11
学会入会情報 .....	11
クィア学会趣意文 .....	12

# シンポジウム 3.11 以後のクィア

11月12日(土) 13:00 - 16:00 (開場 12:00) 3号館 3115 教室

主催：クィア学会幹事会

## シンポジスト：

内田有美さん (性と人権ネットワーク ESTO)

高橋準さん (福島大学行政政策学類 教員)

堤愛子さん (町田ヒューマンネットワーク / DPI 女性障害者ネットワーク)

新田啓子さん (立教大学文学部文学科英米文学専修 教員)

司会：菊地夏野 (名古屋市立大学 教員)

## シンポジウム趣旨：

今年3月11日の大地震と津波、およびそれに続く原発事故の中でわたしたちは不安と焦りのなかにいる。これまで見えにくかった様々な問題 — 都市中心の社会経済、自然を外部化することで成り立つ経済発展、政府と大企業の利益のために動く多くのマスコミと学者 — が噴出してきた。一方で、若い世代の脱原発の動きが広がるなど、新たな変化も現れてきている。

しかしこのようななかで、クィアというスタンスに可能性を感じて研究や活動、日々の実践を行っているわたしたちはどのような位置にあるのだろうか。震災直後には、「クィアどころではない」という言葉が単に軽率と切り捨てられない切迫感を持って発された状況もあった。だがそのような言葉は何を隠しているのだろうか。

ジェンダーやセクシュアリティの視点が切り捨てられるときには、それらは些末な、ミクロな問題であり、より大きな社会構造の問題より後におかれてよいという了解がある。このような了解こそ、性に関わる問題を軽視し、再生産させてきたものだ。

原発事故ははまだ収束を見ず、現地の復興を遅らせている。現地住民はいうまでもなく多くのひとびとが「日常」に戻ることを拒まれ、「日常」に戻ることをためらっている。そして、この状況がもたらす不安は、ひとびとを「安心」の追求に向かわせ、その「安心」は日本社会に制度化された、異性愛主義的な「普通」の生活によって保障されると期待されている。

このようなジレンマの中で、あらためてクィアを名乗る場で何を語り得るのか、何を語り、何によって他者に、社会に関われるのか互いの話に耳を傾ける時間としたい。パネリストにはそれぞれの立場から、問題提起を依頼した。今回のテーマはとりわけ現在

進行形のものであり、ひとつのまとまった結論を期待できるものではない。わたしたちがときに後回しにせざるを得ない不安や恐れ、疑問を言葉にし、対話につなげることができれば、現在の困難な状況を少しでも切り開きひとりひとりがクィアという言葉に新たな可能性を発掘することが出来るかもしれない。

## シンポジストプロフィール

### 内田有美 (うちだ・ゆみ)

大学在学中からGIDの社会的問題に関心を持ち、「GID当事者と非当事者の社会でのより良い共生」をテーマに研究を行う中で、性と人権ネットワーク ESTO に参加する。宮城学院女子大学大学院人文科学研究科生活文化デザイン専攻修士課程修了。修士(生活文化デザイン)。2011年から性と人権ネットワーク ESTO 仙台交流会スタッフとして活動を始める。

### 高橋準 (たかはし・じゅん)

福島大学行政政策学類教員。社会学専攻。2011年6月よりふくしま女性フォーラム代表。3月11日は福島市金谷川の職場で被災。

著書:『ジェンダー学への道案内』(北樹出版)、『ファンタジーとジェンダー』(青弓社)、訳書(共訳および監訳):マギー・ハム『フェミニズム理論辞典』(明石書店)

### 堤愛子 (つつみ・あいこ)

脳性マヒ、車いす使用のピア・カウンセラー。70年代後半より女性障害者の問題や優生思想の問題に取り組む。1986年、国内の女性障害者と共に「DPI女性障害者ネットワーク」を設立。1989年、地域の仲間とともに自立生活センター「町田ヒューマンネットワーク」を設立し、「エンジョイ!

自立生活」を合言葉に、障害者の地域生活のサポートを行っている。現在は、同センターの副理事長兼「ヘルパーステーション・マイライフ」所長。共著に「わたちのリズム」(現代書館)、「わたちの反原発」(労働教育センター)、「優生保護法が犯した罪」(現代書館)などがある。

### 新田啓子 (にった・けいこ)

立教大学文学部教員、同大ジェンダーフォーラム所長。研究分野はアメリカ文学、文化理論。研究領域は、19世紀以降のアメリカ小説および批評、フェミニズム・ジェンダー思想、黒人研究一般、現代アメリカ文化論。研究対象はガヤトリ・スピヴァクやジュディス・バトラーを中心としたアメリカ・フェミニズム、ジェンダー思想の理論的検討、モダニズム期を中心とした黒人文学ならびにラップ・ミュージック、現代アメリカにおける暴力と軍事文化。

# 同時開催プログラム

## 1 映画上映会

日時：11月12日（土）午前10時開場

場所：3号館 2F 3203教室

主催：関西クィア映画祭 実行委員会 (<http://kansai-qff.org/>)

### 入場料について：

学会からの金銭援助がなく独自採算での上映のため、学会参加費に加えて上映会参加費が別途必要です。

- ・出張扱い等で学会参加費や交通費の補助を大学等から受けている人 1000円
- ・学会参加費や交通費を完全に自費で参加する人 500円

## BOTH ～インターセックスとバイセクシュアル

**映画概要** サンフランシスコに住むバイセクシュアル女性のレベッカは、スタントの仕事や素敵な友人、そして男性の恋人と女性の恋人の両方を持っているにも関わらず、何かが足りないと感じている。

ある日ペルーからレベッカに送られてきたアルバムには、彼女の両親と、ずっと前に死んだ兄の写真があったが、レベッカは写っていなかった。しかしその後レベッカは、実は自身の幼年期が、両親と医者によって創りあげられた嘘によって塗り固められていたことを知る。

新生児のおよそ2000人に1人は、身体的特徴から完全に男児であるとも女児であるとも判別しづらい身体をもって生まれ、インターセックス（もしくはDSD）と呼ばれている。そして、インフォームド・コンセントなしで勝手に手術され、ホルモンで「治療」をされている現実がある。

BOTHは、監督本人、及びインターセックス／DSDの状態に生まれた人の実際の経験に基いて創られている。

### ▼『BOTH』

(BOTH/ 監督 Lisset Barcellos/86分/2005年/米国・ペルー / 英語・スペイン語 / 日本語字幕)

## 2 「クィア学会 研究倫理ガイドライン（仮称）」検討ワークショップ

日時：11月13日（日）10：00－12：20（パネル時間帯）

場所：3号館 2F 3206教室

主催：「クィア学会 研究倫理ガイドライン（仮称）」検討ワークショップ（2008年11月～）を運営するクィア学会会員有志（世話人：溝口彰子）

問い合わせ先：[queerethics@infoseek.jp](mailto:queerethics@infoseek.jp)

入場料：大会参加費に含まれます。

## 「クィア学会研究倫理ガイドライン（仮称）」 検討ワークショップ・シリーズ 文献講読まとめの会

「クィア学会研究倫理ガイドライン（仮称）」検討ワークショップ・シリーズ（以下：WS）は、2008年11月にクィア学会有志の活動として承認され、主に都内で活動しています。

第8回（2010年4月）から第13回（2011年7月）では、広い意味で研究倫理に関連する参考文献を読む文献講読会を開催してきました。そこで、第4回大会では、WS6回分の参考文献の概要や各回の議論をまとめて発表し、参加者とさらに議論を深める公開ワークショップを開催します。大会参加者であればどなたでもご参加いただけますので、ふるってご参加ください。

研究倫理の問題にとどまらず、日本におけるクィア・スタディーズの輪郭を議論する場になればと思います。

登壇予定者：

杉浦郁子

溝口彰子（他）

# 個人報告／パネル詳細

おことわり プログラムの報告要旨に個人・パネル名で記載された内容は、あくまでもその個人・パネル構成員の見解であり、クィア学会の見解ではないことをご了解ください。

## 第1自由報告部会 (10:00-12:20、3201教室) P5

- 「同性が好き」をどのようにカミングアウトするか  
濱野良平 (中京大学セクシュアリティ研究会)
- 同性愛者の不可視化された日常と生きづらさに関する質的研究  
永友春華 (早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程)
- HOW QUEER? ～同性カップルの育児書～  
宮崎延之 (同志社大学大学院アメリカ研究科博士後期課程)
- 攪乱される構造、残存する形式：  
政治性と欲望の狭間に生きるメキシコの男性同性愛者  
上村淳志 (一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)

## 第2自由報告部会 (10:00-12:20、3202教室) P6

- Racism and Authoritarianism within JAQS  
ひびのまこと (ばらいろネット)
- 災害時のセクシュアル・マイノリティ  
— Japan レインボー・エイドの事例から  
小澤かおる (首都大学東京人文科学研究科社会学教室博士課程)
- 誰が〈クィア・アクティビスト〉か：  
「非当事者アクティビズム」とアイデンティティ・ポリティクス  
松本政輝 (シカゴ大学社会科学修士課程)
- 当事者／非当事者の協働と表現 —青森インターナショナル  
LGBT フィルムフェスティバルを事例とした考察  
長津結一郎 (東京芸術大学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員)

## 第1パネル部会 (10:00-12:20、3203教室) P7

- 日本映画のクィアな欲望  
司会：菅野優香
- 任侠映画と未来性  
キム・イクリヴィッチ (カリフォルニア大学アーヴァイン校／明治学院大学)
- 表層のクライマックス —木下恵介とクィア研究—  
木下千花 (静岡文化芸術大学)
- パンパン、赤線、女性映画  
—『女ばかりの夜』(1961)とレズビアン表象—  
菅野優香 (京都大学人文科学研究所)

## 第2パネル部会 (13:20-15:40、3203教室) P7

- 越境と混淆の文学 —クィア批評の可能性 司会：黒岩裕市
- 〈ここ〉ではないところから —大江健三郎の小説の男性同性愛表象  
黒岩裕市 (一橋大学ほか非常勤講師)
- 境界の乗り越え方 —多和田葉子の小説をめぐって  
岩川大祐 (東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程)
- 近代国家と文学の誕生  
—20世紀のモンゴル諸族の文学を巡って—  
深井啓 (一橋大学大学院言語社会研究科博士課程)

## 第3パネル部会 (13:20-15:40、3206教室) P8

- 大衆社会と日本の同性愛—歴史的研究から見えてくるもの  
司会：前川直哉
- 近代日本の同性愛言説と「男性的女性」  
赤枝香奈子 (京都大学大学院文学研究科グローバルCOE)
- 戦後、大衆娯楽雑誌における「レズビアン」の概念史：  
1960年代、70年代の表象を中心に  
杉浦郁子 (中央大学文学部ほか非常勤講師)
- 人称「ホモ」の普及 —その1960-70年代における背景と影響  
石田仁 (椋山女子学園大学非常勤講師)
- 戦後日本における男性同性愛者と異性婚  
前川直哉 (灘中学校高等学校教諭、京都大学大学院博士後期課程)

## 第3自由報告部会 (13:20-16:15、3201教室) P9

- ジェンダー化された自分：日本のトランスジェンダー議論に  
おける「ジェンダー・アイデンティティ」、「性自認」の分析  
SPF デール (上智大学グローバル社会博士課程2年)
- 構成／主張された言葉 —ジェンダー・アイデンティティを捉えなおす  
戸口太功耶 (鳴門教育大学大学院学校教育研究科人間教育専攻臨床心理  
士養成コース修士課程)
- 続・身体改造で何が変わり何が変わらないのか  
～性別適合手術の参与観察結果からの考察～ 佐倉智美 (著述業)
- クィア・ペダゴジーの可能性 —ことばの学びを中心に  
クレア マリィ (メルボルン大学)
- 寛容の機能について ～同性愛の文脈を題材に～ 風間孝 (中京大学)

## 第4自由報告部会 (13:20-16:15、3202教室) P10

- 切り刻まれる〈女の身体〉：「新生児殺」に関する言説を中心として  
狩谷あゆみ (広島修道大学)
- 1970年代以降のタイにおけるフェミニズム思想・運動  
藤原佐和子 (同志社大学神学研究科博士後期課程)
- アメリカのテレビドラマにおける流動的なセクシュアリティの偏在  
川西真奈 (同志社大学グローバル・スタディーズ研究科博士課程)
- 黄梅調映画における男装と女声 —『梁山伯與祝英台』を中心に  
張小青 (名古屋大学国際言語文化研究科)
- 〈ホロコースト〉の記憶とセクシュアリティ：  
米国ホロコースト記念館 (USHMM) における髪のマ展示論争と親密圏  
藤巻光浩 (静岡県立大学国際関係学部)

### 報告者索引 (50音順)

赤枝香奈子…………… 8	佐倉智美…………… 9
石田仁…………… 8	杉浦郁子…………… 8
岩川大祐…………… 7	張小青…………… 10
SPF デール…………… 9	戸口太功耶…………… 9
小澤かおる…………… 6	長津結一郎…………… 6
上村淳志…………… 5	永友春華…………… 5
風間孝…………… 9	濱野良平…………… 5
狩谷あゆみ…………… 10	ひびのまこと…………… 6
川西真奈…………… 10	深井啓…………… 7
菅野優香…………… 7	藤巻光浩…………… 10
木下千花…………… 7	藤原佐和子…………… 10
キム・イクリヴィッチ …………… 7	前川直哉…………… 8
…………… 7	松本政輝…………… 6
クレア マリィ…………… 9	宮崎延之…………… 5
黒岩裕市…………… 7	

## 第1 自由報告部会 (10:00-12:20、3201 教室)

---

### 「同性が好き」をどのようにカミングアウトするか

濱野良平 (中京大学セクシュアリティ研究会)

中京大学セクシュアリティ研究会では、大学内でのサークル活動の一環として、2011年6月から7月にかけて、同性愛のカミングアウトに関する質問紙調査を行なった。質問紙は、「同性愛のイメージ」を尋ねる項目(15項目)、もし同性からカミングアウトされたらどう思うかを尋ねる項目(4項目)、フェイスシート項目(3項目)の3部分で構成された。その結果、同性愛のカミングアウトについては、自由記述にて「個人の自由」、「戸惑うと思う」などの回答が得られた。同性愛をカミングアウトされた状況下の友人の反応から、どのようにすればカミングアウトにおける「する側とされる側の意識の隔たり」をなくしていけるのかについて考えたい。

### 同性愛者の不可視化された日常と生きづらさに関する質的研究

永友春華 (早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程)

本研究では同性愛者に焦点を当てた。マスメディアなどでは可視化の傾向にありながらも、日常社会では存在が見えない彼らの生きざまや現代の日本社会における問題点を克服する視点を探ることを目的とした。同性愛を生きる人々に対し半構造化インタビューを行い、語りを分析した。その結果、日常社会で抑圧されている彼らの生きざまが明らかになったと同時に、現代日本の社会制度への問題点が確認された。また、同性愛の問題は、個人と社会との相互関係で生じる社会的に作られた問題であり、正しいとされている知識も、絶対的なものではないということが示唆された。今後は多様な価値観が共に協調し合える社会の可能性を探りたい。

### HOW QUEER? ～同性カップルの育児書～

宮崎延之 (同志社大学大学院アメリカ研究科博士後期課程)

この発表はアメリカで出版されているゲイやレズビアン育児書における同性カップルの育児を巡る家族言説を分析していきます。育児書では、ゲイやレズビアン親たちが直面するさまざまな問題を取り上げ、それらの問題を解決していくために、異性愛前提や家族規範の「ずれ」や「隙間」を突くさまざまな秘策が書かれています。家族を支える異性愛主義的と言われているさまざまな文化装置には意外と抜け穴が多いことをこれら育児書は示唆しているのではないのでしょうか。このような「ずれ」や「隙間」こそが家族制度の不完全さを表しているのではないかということはこの発表では議論したいと思います。

### 攪乱される構造、残存する形式：

#### 政治性と欲望の狭間に生きるメキシコの男性同性愛者

上村淳志 (一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)

性交(特に肛門性交)の役割を前提とした能動 activo と受動 pasivo の二分法は、メキシコにおいて男性同性愛者差別を支えてきた構造であり、メキシコの男性同性愛を理解する際の基盤として言及されてきた。メキシコの男性同性愛者は、能動/受動の両方をこなし、役割の固定性を揺るがすことで、能動/受動の二分法の抱える権力性を解体しようと試みてきた。その一方、肛門性交はメキシコの男性同性愛者の中では主要な性愛の形態であり続けており、性交時の役割確認は現在でも問題になる。本報告では、そうしたメキシコの男性同性愛者にとっての政治的攪乱と性愛の在り方の兼ね合いについて報告する。

## 第2 自由報告部会 (10:00-12:20、3202 教室)

### Racism and Authoritarianism within JAQS

ひびのまこと (ばらいろネット)

This presentation will address racism and authoritarianism within JAQS, with emphasis on the responsibility of the 1st KANJIKAI. The statement made by Kazama Takashi, chairperson of KANJIKAI, at the general meeting last year must also be critically examined as racist statement.

### 災害時のセクシュアル・マイノリティ — Japan レインボー・エイドの事例から

小澤かおる (首都大学東京人文科学研究科社会学教室博士課程)

東日本大震災の直後、首都圏在住の性的少数者運動の活動家たちの一部は、支援組織を立ち上げ、被災地の性的少数者への支援ができないか模索していた。がんばろう日本の旗印のもと、弱者／マイノリティの困難が不可視化されることは容易に想像されたが、現地の活動家たちとネットなどで連絡がつき始めた時受け取ったメッセージは支援の要請ではなくむしろ辞退であった。性的少数者であることを隠し、血縁家族や地域社会の一員であり続けることを必要とするこの社会とは何か。震災後3週間後からの被災地周辺におけるニーズ調査、その後の被災地と首都圏との交流を通して見えてきたことを、クィア学会という場で共有し、問題解決への道を探りたい。

### 誰が〈クィア・アクティビスト〉か：

「非当事者アクティビズム」とアイデンティティ・ポリティクス

松本政輝 (シカゴ大学社会科学修士課程)

アイデンティティ・ポリティクス、エイズ運動、クィア運動、権利獲得運動、解放運動、同化主義、分離主義など、クィアな主体をとりまく政治的状況には常に様々な思想や戦略、運動形態の衝突・協力・相互批判が存在してきた。その中で独特の位置づけを持つ団体として、米国における主流派のLGBT運動に携わっているにもかかわらず、一方で「非当事者アクティビズム」を前面に出して活動するPFLAG (レズビアンとゲイの親・家族・友人の会) について、特にPFLAGメンバーのインタビューから見えてくる階級・宗教・人種等の問題に注視しながら、考察する。

### 当事者／非当事者の協働と表現

——青森インターナショナルLGBTフィルムフェスティバルを事例とした考察

長津結一郎 (東京芸術大学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員)

クィアという概念には「当事者」「非当事者」という境界線が重層的に絡まり合い、誰もが当事者「であり」かつ当事者「ではない」状況を創出するように思われる。芸術表現はまさにこのような、既存の価値観や境界をずらし、つなぎかえるためのツールとして機能することが往々にしてある。本発表では事例として青森市内で2006年より開催されている「青森インターナショナルLGBTフィルムフェスティバル」をめぐる状況について取り上げ、映画という表現行為や映画祭という「場」を媒体として、「当事者／非当事者」のあいだにある境界の在り様やその越境、さらには協働の可能性について考察する。

## 第1パネル部会 (10:00-12:20、3203 教室)

### 日本映画のクィアな欲望

司会：菅野優香

本パネルでは、日本映画のクィアネスを、ジャンル・作家・女優／キャラクターという三つの角度から分析する。男同士の絆で知られる「任侠映画」、日本初のゲイフィルムと呼ばれる『惜春鳥』(1959)、浪速千栄子演じるレズビアン・キャラクター亀寿(『女ばかりの夜』)を取り上げ、日本映画とクィア研究の接合点を考える。

### 任侠映画と未来性

キム・イクリヴィッチ (カリフォルニア大学アーヴァイン校／明治学院大学)

これまでの任侠映画の批評で、特に興味深い論点は男の肉体や男同士の絆であった。こうしたクィアに関係する論点に、私はリー・エーデルマンの「生殖の未来」と'sinthomosexuality」という概念を付け加えたい。本発表では、この二つの概念をもとに、任侠映画のジャンル特性と死の文化との関連性について検討してみたい。

### 表層のクライマックス —木下恵介とクィア研究—

木下千花 (静岡文化芸術大学)

木下のゲイ性を出発点とすることで、長らく戦後イデオロギーの体现者と見なされてきた巨匠の映画を、性と家族に関する規範性に対するシニカルな批評として照射できないか。本発表は、会津若松を舞台とした『惜春鳥』(59)をとりあげ、クライマックスたる異性愛心中の陰画として、白虎隊の歴史と交歓する男同士の心を見出す。

### パンパン、赤線、女性映画 —『女ばかりの夜』(1961)とレズビアン表象—

菅野優香 (京都大学人文科学研究所)

『女ばかりの夜』(田中絹代、1961)は売春防止法を背景に、婦人寮で更生を目指す女性たちを描いた映画である。この女の共同体に登場するのが浪花千栄子演じるレズビアン・キャラクター、亀寿である。本報告では、当時の主流劇映画では極めて異例なこのレズビアン表象を、赤線、パンパン、女性映画との関連において分析する。

## 第2パネル部会 (13:20-15:40、3203 教室)

### 越境と混淆の文学——クィア批評の可能性

司会：黒岩裕市

文学は共同体の境界線を画定するものである。だが同時に、その境界線を無効化し、解体しうるものでもある。本パネルでは、文学の言葉の中に、境界を越境する力を見出し、混淆する響きを聴くことを目指す。その際、性に関連した問題に光を当てることで、クィア批評の可能性を探求し、国民国家や国語の均質性を問う。

### 〈ここ〉ではないところから —大江健三郎の小説の男性同性愛表象

黒岩裕市 (一橋大学ほか非常勤講師)

男性同性愛が表象される時、〈ここ〉ではない国や地域に由来するもの、外部からもたらされるものとして語られることがしばしばある。そうした言説をどのように読み解いていったらいいのだろうか。本報告では、1950年代後半に発表された大江健三郎の小説を中心に、当時の時代背景にも目を向けつつ、この問題について考える。

### 境界の乗り越え方 —多和田葉子の小説をめぐる

岩川大祐 (東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程)

ジェンダー化され、階層化された日本語の人称の問題をとりあげ、言語、国家、現代文学を繋ぐ視座から、「あなた」という二人称で書かれた多和田葉子の小説について考察する。その上で、「母語の外に出る旅」とクィアな言語実践がいかに重なりあうのか、男性と女性、人間と動物といった境界の乗り越え方について模索する。

### 近代国家と文学の誕生 —20世紀のモンゴル諸族の文学を巡って—

深井啓 (一橋大学大学院言語社会研究科博士課程)

20世紀初頭、近代的な国家建設を目指したモンゴル諸族の指導的地位にあった知識人たちにとって近代的な文学の誕生は切実な問題であった。彼らはなぜ文学を必要としたのだろうか。本発表では近代国家建設期のモンゴルを取り上げ、国家と文学の関係性、および両者が画策した性の管理といった問題を取り上げたい。

## 第3パネル部会（13:20-15:40、3206 教室）

---

### 大衆社会と日本の同性愛——歴史的研究から見えてくるもの

司会：前川直哉

本パネルは報告者各人の成果をもとに、セクシュアリティ研究における歴史的なアプローチの可能性を探る試みである。歴史的研究に派手さはないが、現在の私たちがどのような場所に立っているのかを照らしだす力をもつ。パネルでは現在の日本でレズビアン・ゲイの解放が進まない理由についての見地も提示したい。

#### 近代日本の同性愛言説と「男性的女性」

赤枝香奈子（京都大学大学院文学研究科グローバルCOE）

女同士の親密な関係を取り上げた戦前の雑誌記事をもとに、そこに見られる女性同性愛概念の特徴と「男性的女性」の論じられ方を考察し、それらが戦後の女性同性愛をめぐる言説にどのように接合されたか検討する。そこから浮かび上がってくる、近代日本におけるジェンダー／セクシュアリティ規範について議論したい。

#### 戦後、大衆娯楽雑誌における「レズビアン」の概念史：

1960年代、70年代の表象を中心に

杉浦郁子（中央大学文学部ほか非常勤講師）

1960年代に雑誌記事に登場した「レズビアン」という概念の変容を記述する。「オナベ」が「レズビアン」から離脱するプロセス（性指向と性自認とを切り離す認識枠組が定着するプロセス）を中心に、「レズビアン」の意味の変化をたどる。また、このプロセスのなかで、レズビアンの欲望や主体の不可視化が進んでいる現状を考える。

#### 人称「ホモ」の普及 —その1960-70年代における背景と影響

石田仁（椋山女学園大学非常勤講師）

1960-80年代の「ホモ」の語られ方を追う。60-70年代で、本当の「ホモ」は、「普通の男」として日常生活に潜伏しているが、男の上下関係やサウナなどで「ホモがホモを産む」連鎖があると捉えられた。この偏見を払拭する有効な言説が育たないままにエイズ渦の80年代に突入し、差別は苛烈になったと考えられる。

#### 戦後日本における男性同性愛者と異性婚

前川直哉（灘中学校高等学校教諭、京都大学大学院博士後期課程）

『アドニス』および1970年代の『薔薇族』を史料に、模索された男性同性愛者の異性結婚のあり方を検証する。ここでは「異性との結婚」と「同性との交際」の両立が希求され、男性同性愛者というアイデンティティは「自分は同性愛者だから、（家庭では満たされない）男性との浮気も仕方がない」のようにも利用された。

## 第3 自由報告部会 (13:20-16:15、3201 教室)

### ジェンダー化された自分：日本のトランスジェンダー議論における「ジェンダー・アイデンティティ」、「性自認」の分析

SPF デール (上智大学グローバル社会博士課程2年)

性同一性障害とは、「心」と「体」が一致していない、つまり「ジェンダー・アイデンティティ」が生まれた時に与えられた性別と違うという説明がなされている。これに加えて、トランスジェンダーの場合ではジェンダー・アイデンティティはそれぞれであり、男か女かの二つのカテゴリーに限られていないという議論もある。本論は、その「ジェンダー・アイデンティティ」いわば「性自認」を、日本語におけるトランスジェンダー・性同一性障害の議論を通じて批判したい。「ジェンダー・アイデンティティ」は最近の概念であり、日本語でどのような意味があるか、どのように成立したかなどの問題をあげて考察したい。

### 構成 / 主張された言葉 — ジェンダー・アイデンティティを捉えなおす

戸口太功耶 (鳴門教育大学大学院学校教育研究科人間教育専攻臨床心理士養成コース修士課程)

人が己のセクシュアリティについて語るとき、用いられる言葉には性自認、性同一性、ジェンダー・アイデンティティ、性的指向、セクシュアルオリエンテーション、生物学的性、身体の性、ジェンダーといったものが挙げられる。しかして、それらの言葉の扱われ方、構成のされ方は学問領域において社会学、心理学、医学のそれぞれで異なっている。構成概念としての生成と分析は心理学で行われ、当事者が主張してきている概念をより明確にする手助けとなる一方、心理学特有の齟齬も生じている。本報告では、この心理学に焦点を当てつつ、社会学、医学、心理学において構成されてきた概念と当事者の扱う概念について検討したい。

### 続・身体改造で何が変わり何が変わらないのか

#### ～性別適合手術の参与観察結果からの考察～

佐倉智美 (著述業)

トランスジェンダーにとっての身体改造が、社会的な意味づけとの齟齬を解消する側

面もさることながら、本人自身のセクシュアリティに照らした内的な自己満足の要素が大きい可能性を、自らのホルモン事例の考察を通じて示した昨年度の報告を踏まえ、今年度はその性別適合手術編として、「クィアな身体」「自己のセクシュアリティにかかわるアイデンティティ」「自己と他者が紡ぐ社会」の位置関係に肉薄してみたい。特に、医療というセクターの意義と限界、泌尿器形状の変化体験から見えるもの、性別適合手術が個々人のトランジションに及ぼす効果の社会的意味、などの観点から。また、障害学的な知見も参照の見込み。

### クィア・ペダゴジーの可能性 — ことばの学びを中心に

クレア マリィ (メルボルン大学)

本発表では、クィアな視点から日本の多文化性を考察し、日本語話者の複合アイデンティティを考慮したことばの学びに関わる「わたし」を批判的かつ批評的に取り上げる。まずは、「多文化共生」という概念に立ち戻り、民族や国籍に依存しない、複合的アイデンティティの重要性を指摘し、学びの場において未だに語られにくい「わたし」、言い換えれば沈黙を強制されるアイデンティティについて考える。複合アイデンティティを包括的にとらえる言語教育を検討したうえで、複合的に多文化共生を捉える必要を示し、「外国人」という完全たる他者の再生産を避けるための方法として、「クィア・ペダゴジー」からの助言を取り入れながら論じていく。

### 寛容の機能について ～同性愛の文脈を題材に～

風間孝 (中京大学)

多文化共生における目標として、あるいは暴力の排除と抑圧の減少を表す用語(マルクーゼ)として使われるとき、寛容はポジティブな意味を帯びている。だが、日本は同性愛に寛容な社会であるといった、セクシュアリティの文脈で用いられるとき、それは暴力や抑圧、嫌悪の非在を示しているのだろうか。それとも隠蔽として機能しているのだろうか。本報告では、現代日本における同性愛者への寛容な振る舞いを題材にしながら、寛容の機能について検討したい。

## 第4 自由報告部会 (13:20-16:15、3202 教室)

### 切り刻まれる〈女の身体〉：「新生児殺」に関する言説を中心として

狩谷あゆみ (広島修道大学)

法学、犯罪学のテキストや『犯罪白書』において、「男性の犯罪」という項目は見られないが、「女性（婦人）の犯罪」という項目は必ずと言っていいほど目にする。例えば大正期以降、ロンブローゾの影響を受け、月経周期など〈男性〉とは異なる身体的特徴を持つことを科学的根拠とした記述が多く見られる。戦後には「家庭における女性の役割」や「女性の社会進出」と関連づけられた記述も見られる。本報告では、特に〈女性〉特有の犯罪として位置づけられてきた「嬰兒殺（新生児殺）」を中心として、大正期以降から2000年代の犯罪学に関するテキストまでを概観し、「女性の犯罪」をめぐる言説の変遷とその社会的意味について考察していく。

### 1970年代以降のタイにおけるフェミニズム思想・運動

藤原佐和子 (同志社大学神学研究所博士後期課程)

タイにおける女性の就労率が全階層的に高く、世界有数の共働き社会であることは、フェミニスト的な語りや行いに対する十分な社会的受容を意味するものではない。タイのフェミニズムは20世紀初頭の女性誌に萌芽し、その中葉においてビジネス、法曹界に属する女性たちの中で散在的に現れたが、女性をめぐる問題が学問的に議論され始めたのは、学生革命とも呼ばれる大規模請憲デモが起きた1973年10月14日以降のことである。本報告は1989年にタイにおいて初めて女性学が研究されたチェンマイ大学社会学部にて収集した資料を元に、レズビアン運動を含めた1970年代以降のタイの女性運動（フェミニズム運動）の諸相について考察する。

### アメリカのテレビドラマにおける流動的なセクシュアリティの偏在

川西真奈 (同志社大学グローバル・スタディーズ研究科博士課程)

この研究は、アメリカのテレビドラマ文化の中で、ヘテロセクシズムが規範となったヘテロ・ホモセクシュアリティの二項対立の構造においても、流動的なセクシュアリティ（相手の性別を指標としないセクシュアリティ）があらゆるところに表象されているとい

うことを指摘するものである。二項対立の構造を揺るがす可能性をもつ流動的なセクシュアリティが、表象の場に不在なのではなく、偏在していることは何を意味するのだろうか。この問題を、いくつかのテキストにおいて、どのように流動的なセクシュアリティが取り上げられ、それに対してどのような態度が取られているのかを分析することから考察していきたい。

### 黄梅調映画における男装と女声 ——『梁山伯與祝英台』を中心に

張小青 (名古屋大学国際言語文化研究科)

黄梅調映画は中国独特の一つの映画ジャンルであり、中国伝統演劇である黄梅戯から音楽、物語やスタイルまで取り入れている映画である。しかし、このジャンルの映画は女性観客には多大な人気が出た。本発表は黄梅調映画の生成と隆盛の歴史を辿り、この映画ジャンルの特徴を探りながら、悲恋物語の代表とする『梁山伯與祝英台』を中心に、女性俳優による多情な男性主人公「梁山伯」の演じ方や、女性歌劇歌手による声に注目し、映画が作り上げた幻想的な身体空間を論じるとともに、黄梅調映画が女性観客に人気が出た原因を探るつもりである。また、黄梅調映画に対する再評価を提案する。

### <ホロコースト>の記憶とセクシュアリティ：

#### 米国ホロコースト記念館（USHMM）における髪の毛展示論争と親密圏

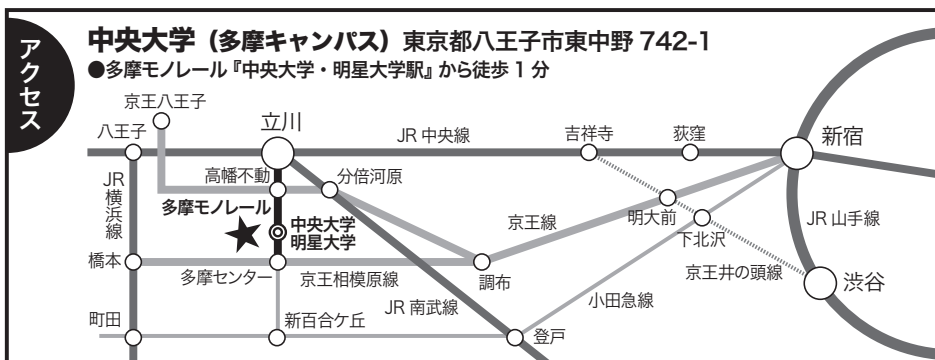
藤巻光浩 (静岡県立大学国際関係学部)

米国ホロコースト記念館というミュージアムがある（1994年開館：ワシントンDC）。ホロコーストの記憶を米国において定着させようとする本博物館は、展示に関して本物を置く方針をとる。人間が切断された台や、被害者の靴までも展示してきた。しかし、犠牲者の髪の毛は例外であった。それはナチスの残虐性と恐怖を最も効果的に伝えようと考えられた。しかし、ポルノグラフィーを喚起し、「親密」過ぎるという理由で、その写真を展示するのにとどまった。本稿は、この髪の毛展示・表象を事例にとり、<博物館>において「親密」な領域にあると考えられるものは、どのように公共と親密の間の境界線を生み出し、政治性を発揮するのかを議論してみたい。

## 大会会場案内

### 中央大学

大学所在地（多摩キャンパス）：〒192-0393 東京都八王子市東中野 742-1



指定の休憩室以外でのご飲食はお控えください。また、指定場所以外は禁煙となっております。  
みなさまのご協力をお願いいたします。

## トイレについて

大会中利用可能なユニバーサル・トイレは以下の通りとなります。

- ・メイン会場：3号館1階、2号館1階（2号館入り口に段差有り）
- ・懇親会会場：1号館3階

## お弁当について

学会期間中、モノレールの駅周辺および大学構内でお弁当などを購入できる場所は大変少なくなっております。特に13日（日）は構内の店舗や食堂もすべて休みになりますので、必要な方は必ず各自で持参ください。学会によるお弁当の予約は受け付けませんのでご注意ください。

## 懇親会について

学会初日（11月12日、土）の総会終了後、18:00から20:30まで学内にて懇親会を行います。みなさまふるってご参加ください。懇親会費は、会費の区分が「常勤職のない方」で、かつ学生の方のみ2,500円、それ以外の方はすべて4,500円です。

（会費の区分については、学会入会情報をご参照ください）

## 学会入会情報

学会未加入のかたは、この機会にぜひご加入ください

会計年度境目：10月→翌年9月 会費納入方法：研究大会および郵便振替にて

会員の特典：機関誌『論叢クィア』を進呈します。機関誌への投稿および大会発表の申込みの権利があります。

年会費：常勤職に就いている方（日本学術振興会特別研究員などを含む）は8,000円、学生・院生・OD等常勤職のない方は5,000円です。当該年度内に常勤職についている期間がある方は、常勤職とします。海外在住の方の年会費は、学会誌の郵送やカード決済の手数料等の費用を考慮し、1,000円の増額をさせていただきます。

### 入会の方法：

1. 入会申込書をクィア学会事務局宛に添付メールか郵送の形でお送りください。入会申込書は <http://www.queerjp.org/anai.html> よりダウンロードできます。

メール送付先：membership@queerjp.org  
郵送先：〒467-8501 名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑1  
名古屋市立大学人文社会学部 菊地夏野研究室気付 クィア学会事務局

2. つぎに、郵便振替で下記口座まで年会費を払い込み下さい。入会金はかかりません。

口座：00170-7-412546 加入者名：クィア学会

3. ご入金完了したら、入会完了の案内をお知らせするとともに、会員番号が付された領収書をお送りします。お名前と会員番号によって会員管理をさせていただきますので、領収書を失くさずに保管ください。

### 寄付のお願い：

クィア学会は、寄付を随時募集しております。お支払いいただいている会費は、学会誌と次年度の大会準備資金として使われ、運営に余裕がない状態が続いております。みなさまには入会の積極的な勧誘とともに、寄付をぜひお願い申し上げます。

【郵便口座の場合】口座番号：00170-7-412546 加入者名：クィア学会

【PayPalの場合】クレジットカードによる寄付もできます。

[https://www.paypal.com/j1/cgi-bin/webscr?cmd=\\_home-general&nav=0%81j](https://www.paypal.com/j1/cgi-bin/webscr?cmd=_home-general&nav=0%81j)

※寄付されるさいには、寄付であることをお知らせください。  
学会当日にも受付において寄付をお受けいたしますので、どうぞよろしくお願いいたします。

## クィア学会趣意文

本学会は、学際的な研究領域であるクィア・スタディーズに関心のある研究者に、相互交流と研究成果共有のための一つの場を提供することを、目的とする。クィア・スタディーズがかかわる文化的・社会的な取り組みは、広範で柔軟な連携を必要とするものである。この認識にもとづき本学会は、学術研究者にとどまらず多様な社会・文化活動に従事する人びとが広く知見の共有や意見の交換をおこなう場を提供する。

クィア・スタディーズとは、性と身体、そして欲望のあり方にかかわる諸規範を問いなおそうとする、批判的／批評的な学術的探究の総体であり、以下に代表されるような試みの全てを含む。ジェンダーとセクシュアリティとをどちらか一方に還元することなく、しかもその両者が既存の性と身体、そして欲望のあり方にかかわる諸規範の下でいかに関連してきたのかを、分析すること。これらの諸規範が、社会において自然とみなされる身体やアイデンティティなどにかかわる認識の様態をいかに条件づけてきたのかを、考察すること。それらの規範的認識とそれによって維持される経済的・社会的・あるいは表象上の権力構造とが、人種・民族・宗教・国籍・地域・言語・経済階層・身体性などにおける諸差異といかに相互に作用しあってきたのかを、理論的また実証的に検討すること。そして、既存の規範に従わないようないかなる性と身体のあり方、いかなる欲望の形態が可能であり、あるいはより望ましいのかを、探究すること。

クィア・スタディーズはまた、既存の「性の規範」から外れた多様なジェンダー表現や性的・文化的実践、および、この規範を問い直し続けてきたレズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー運動やフェミニズムなどの多様で広範なアクティビズムや学問的探究の蓄積の上で生まれた学問領域である。その意味でクィア・スタディーズは、そもそも、既存の「性の規範」の下で法的・経済的・社会的・文化的な抑圧や不利益を被ってきた人びとの生の質を向上する目的をもった社会・文化的活動の一環であり、目的を同じくする他の諸活動との協働なくしては存在しえない。

本学会は、クィア・スタディーズを構成するこのような異種混濁性と批判的／批評的視座とにかんがみ、異なる活動領域から提示される異なる活動領域から提示されるさまざまな見解が対話を継続していくことが、クィア・スタディーズのより一層の展開には不可欠であると考えている。したがって本学会は、参加者による対等で民主的な運営を通じてこのような対話の場を維持することで、日本におけるクィア・スタディーズの確立・発展に寄与しようとするものである。